

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二6:1~2「今は恵みの時」

[1]「私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください」

パウロは5:20節に続いてここでも懇願する。「懇願」とは切に願うという意味。彼はこのことを、「神とともに働く者として」すなわち神の同労者としての強い自覚を持って訴えている。

救いに関して言えば、神はその一言で天地万物を造り、すべてを支配しておられるお方であるが、この1節からもわかるように、神はまた、人を通してその救いの働きをなされるお方なのである。→マタイ28:19~20（大宣教命令）、Iコリント1:18~21（宣教のことばの愚かさを通して）

それゆえ、人が救われ、信仰を持ち、またクリスチャンとして成長し、教会を形成していくのは、人間とは何かということを考えると恐れ多いことであるが、神と人との共同作業なのである。

あくまでも人の救いは神のなさることである、人間は何もする必要がないと主張する人は次の聖書の箇所を読むと良い。→箴言24:11~12、エゼキエル書18:23

[2]「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたがたに答え、救いの日にあなたがたを助けた』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」

パウロがここで引用しているのは旧約のイザヤ書49:8節のことば。イザヤはBC8世紀に活躍した預言者。これは神が大いなる救いのわざをなされるという預言であり、直接的には囚われのイスラエルの民がバビロンから解放されることを意味するが、もっと広い意味では、罪の中にとらわれている、終末に至るすべての民に対して呼びかけられていることばである。

1, 2節で語られている「恵み」ということばの意味は、神から与えられる愛のかえりみと祝福とあわれみのことを指している。人が救われるのは神の一方的な恵みなのである。そしてそれが今、福音によって示されている。

注意しておかなければならないことは、ここでパウロはすでに救われてクリスチャンになっているコリント人たちにもう一度救われるように懇願しているのではなく、パウロがコリントから去った後、偽使徒たちが入り込んで神のことばに混ぜ物をし、別の福音を教えた。→2:17、11:4 そのため、本当の福音が彼らの生活の中に実を結ばず、神の恵みが無駄になってしまうように見えた。キリストが彼らのために死なれたのは、もはや彼らが自分のためにではなく、キリストのために生きるようになるためであったのに必ずしもそのような信仰生活を送っていなかった。それで、パウロはコリント教会の人々が、神の恵みをむだに受けなくて、実を結ぶように勧めているのである。人を救うのも神の恵みであるが、救われた者が信仰を持って健全に成長し、キリスト者として良き実を結んでいくのも恵みなのである。彼らは人を救い、成長させ、実を結ぶ福音を聞き、それに信じ従う特権を与えられている。確かに、今は恵みの時、救いの日なのである。しかし、この時はいつまで

も続くわけではない。やがて世の終わりの神のさばきの時がやって来る。
正しく、健全なイエス・キリストの福音からそれ、間違った方向、実を結ばぬ滅びの道へ行くことのないように、それらを台無しにしてしまうようなことのないようにパウロは切に願っているのである。
私たちも神の恵みをむだに受けることなく、良き実を結ぶものとなり、しっかりと正しい福音、正しい信仰に立って歩む者とならなければならない。